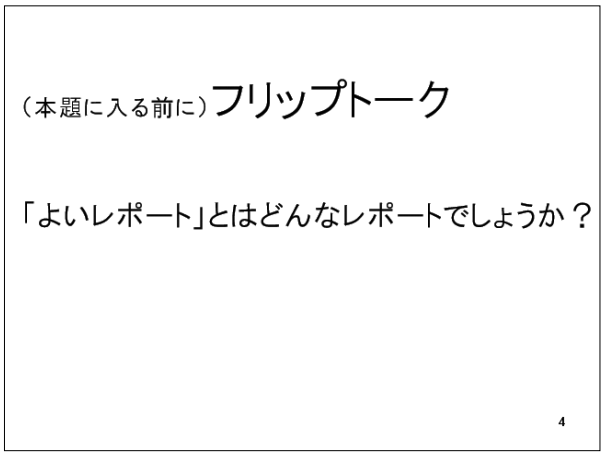
講演「レポート課題をどのように設定するか？ ― 自分で考えさせるレポートの出し方について考える ―」

成瀬　尚志

大阪成蹊大学　准教授

成瀬：初めまして、大阪成蹊大学の成瀬と申します。この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございます。今回のセミナーでは、レポート課題をどのようにして出すかということについて、皆さんと考えていきたいと思います。お付き合いのほど、よろしくお願いします。貴学の関田先生（CETL センター長）には以前よりお世話になっており、いろいろと気に掛けていただいておりますが、今回このような機会をいただき、本当にありがとうございます。まずは、簡単に自己紹介をさせていただきます。私はもともと哲学を専門にしておりまして、分析哲学や科学哲学をテーマに研究をしていましたが、最近では専ら、今回のテーマであるレポート課題に関する研究をしております。その中でも、特に多くの方が悩まれていると思われるコピペ対策について研究しています。



本日のセミナーでは、まず「どのようにすれば学生が自ら考えてレポートを書くようになるのか」ということについて考えます。しっかりと考えて作られていないレポートは読んでいて悲しいですし、教育的な効果もありませんので、その点をどうするかについて考えたいと思います。そのためにも、「レポート課題を出す際に教員側が検討すべきこと」について考察していきます。最後に「どのようなレポート論題があるのか」ということについて、皆さんと一緒に考えたいと思います。「○○について説明せよ」「○○と○○の比較について論じなさい」などの教員からの指示文のことを「レポート論題」と呼んでいます。論題にはどのような種類があるのかということについても、皆さんと一緒に考えたいと思います。そもそも良いレポートとはどのようなものなのかということも検討しながら、この３つの問いについて考えていきます。今回のセミナーでは、基本的に講義科目でのレポート課題を前提としております。初年次のライティング科目とも関係はしますが、講義で教員からのインプットがあって、それに対して理解度を問うようなレポート課題を想定しています。

まず本題に入る前に、良いレポートとはどのようなものなのかについて皆さんに考えていただきたいと思います。皆さんのお手元に配られ

ているＢ４用紙に、「良いレポート」を一言で表すならどのようなレポートかということについて、先生方ご自身の考えを書いていただきたいと思います。授業によって異なるかと思いますので、特定の科目を念頭に置いて考えていただいて構いません。後ほど、書いたものを３名ほどのグループで見せあいながらフリップトークをしていただきます。それでは、記入してください。

【グループディスカッション①】
（各自の意見を記入後、グループでフリップトークを実施）

それでは、一旦ここで区切ります。皆さん、ありがとうございます。少し聞いて回りましたが、やはり論拠が書かれているかどうかを条件に挙げている方が多かった印象です。すべては見れていませんが、形式面がしっかりしているかを挙げている方は少なかったように思います。

教員が考える良いレポート像については私も調査をしていまして、皆さんのお手元には無いのですが、こちらは全国の先生方を対象に、各論題に対する２つのレポートを提示して、どちらに高い評価をつけるかを聞き、結果をまとめた資料です。国公立・私立の区別なく、91名の方にご回答いただきました。

まず１つ目の質問では、αさんの「自分なりの考え方が書かれていて独創性の芽が感じられるレポート」と、βさんの「文献や資料を引用し、課題の考察に必要なエビデンスや情報が調べられているレポート」を比較してもらい、ほとんどの方がβさんを高く評価しています。αさんの方を高く評価する方は１/４程度でした。

２つ目の質問では、αさんの「内容に関しては特筆すべき点はないが、文献表の引用、参照の仕方などのレポート執筆の決まりがしっかり守られているレポート」と、βさんの「文献表などの執筆の決まりに関しては問題があるものの、読んでいて面白いレポート」です。これは悩ましいと思いますが、どちらかというとαさんのレポートを高く評価するという先生が多いです。

３つ目の質問は、αさんの「講義の内容を踏まえており、専門用語や概念を正確に理解しているレポート」と、βさんの「専門用語や概念の理解に曖昧さがあるものの、講義で扱っていない内容にも踏み込んで書かれているレポート」です。これもやはりαさんが多いですが、全員がαさんを高く評価しているわけではないということも一つのポイントかと思います。

４つ目の質問は、αさんの「興味深い様々な考察を行っているが、統一性がない長めのレポート」と、βさんの「明確な指標を打ち出し、それに必要なだけの記述を行う短めのレポート」です。αさんのレポートが少しネガティブすぎる表現なこともあって、ほとんどの方がβさんの方を高く評価しています。このように、科目の違いもあるかと思いますが、どの点を評価するかということは教員によってかなり違いがあります。

１．他の教員の論題を知る

これらを踏まえて、セミナーの本題に入ります。本セミナーの構成として、まずは他の教員がどのような論題を出しているかを知っていただきたいと思います。そして次に、学生の視点からレポート課題について考えてみます。普段は教員の立場からレポート課題の出し方や評価のつけ方を考えられていると思いますが、視点を変えてみましょう。そして、レポート論題の多様性と、それらをどう整理すべきかについて考察していきます。最後に、学生へのレポート課題の提示の仕方を模索します。

まず１つ目の「他の教員の論題を知る」というテーマです。皆さん、他の先生がどのようなレポート論題を出されてるかをご存知でしょうか。もしかしたら学科内などで共有されてると

ころもあるかもしれません。他の教員が指定している字数制限や評価のつけ方等は知る機会があまり無いのではないかと感じています。さらに学科や学部を超えてとなると、知る機会は少ないでしょう。授業手法についてはセミナーやテキスト、あるいは廊下で通りかかったときなどいくらか知る機会があるかもしれませんが、論題については知る機会があまり無いかと思いますので、是非この機会に同じグループの先生方がどのような論題を出されてるかを共有していただこうと思います。

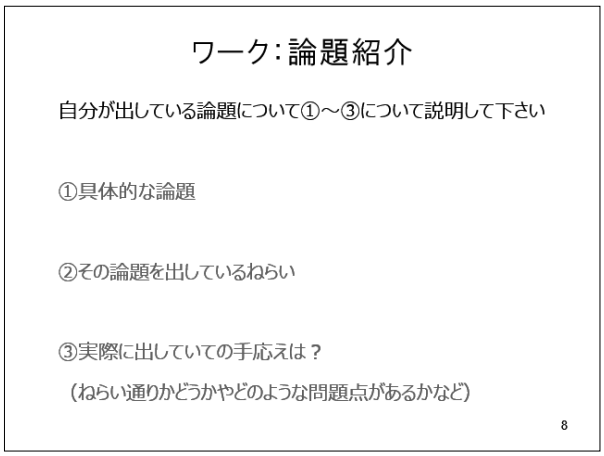
先程の紙の裏でも別の紙でも構いませんので、ご自身が出されているレポート論題について書いていただいて、先程と同じようにフリップトークをしていただきます。まず１つ目の項目として、一つの科目を念頭に具体的な論題を記入してください。論題は長い場合もあると思いますが、他の方に伝わる程度にまとめていただければと思います。そして２つ目に、その論題を出している狙いを書いてください。「こういうところを書いてほしい」「こういうところを頑張ってほしい」など、その論題の狙いです。３つ目に、実際に論題を出していて感じる手応えを書いてください。狙いどおりにいっているか、どのような問題点があるか、実際に学生のレポートを読んでどのように感じられているかといったことを記入いただければと思います。グループの皆さんが書き終えましたら、先程と同じようにフリップを上げて共有してください。論題紹介です。それでは、記入の時間を取ります。よろしくお願いします。

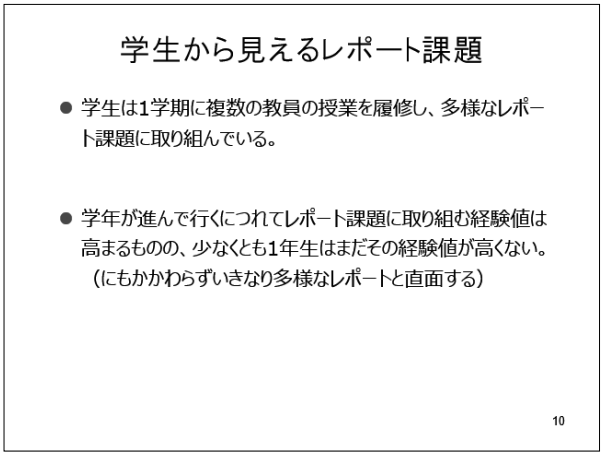
【グループディスカッション②】
（各自の意見を記入後、グループでフリップトークを実施）

そろそろ終わりましたでしょうか。皆さん、しっかり共有していただいて、ありがとうございました。すごく雰囲気がいいですね。私も見させていただきましたが、どの先生方も丁寧に論題を設定されているという印象を持ちました。３つ目の手応えの項目も、多くの先生方が概ね上手くいっていらっしゃるようだと感じました。一方で、「〇〇だけで終わってしまうレポートが多い」というのも少し見受けられました。あとは評価のつけ方について悩まれている方もいらっしゃるようでした。論題は授業による違いもあるかと思いますが、個々の教員によっても違いがあるということが見えてきたかと思います。

２．学生の視点で考える

それでは２つ目のセクション「学生の視点で考える」に移ります。先ほどのフリップトークで、それぞれ授業が異なるということと共に、出題の仕方や論題、評価のつけ方は教員ごとに異なるということがお分かりいただけたかと思いますが、学生は１学期に様々な教員の授業を受け、多様なレポート課題に取り組んでいま





す。学年が上がるにつれ、レポート課題の多様性やそれぞれの課題への取り組み方も分かっていきますが、１年生は経験値が少ないのにも関わらず、いきなり多様なレポートと直面するという問題があると思います。渡辺哲司さんという元九州大学の教員で、いまは文部科学省におられる方が書かれた『「書くのが苦手」をみきわめる』という本（渡辺哲司、2010、学術出版会）で、「学生は書くことをとても苦手にしているのは何故なのか」ということを分析されていて、そこからいくつか事例を持ってきました。

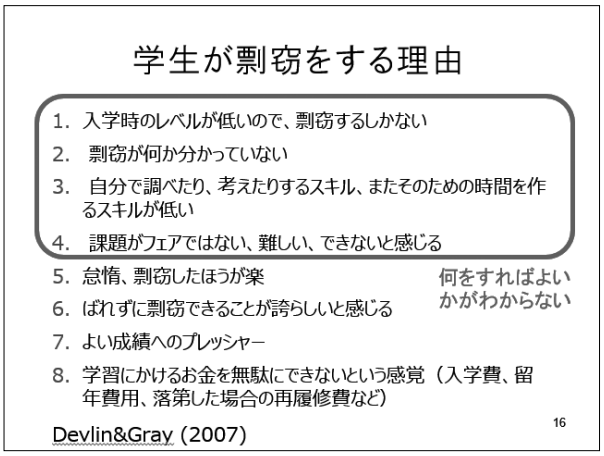
この事例は実際に渡辺先生が調査された九州大学のものです。下に科目名が書いてあって、これは「空間表現実習」の事例です。この「出題文」というのがいわゆる論題で、「芸術家のための空間を建てる場所」、論題はこれだけ。そしてこちらは学生が書いた「苦労の内容」ですが、「漠然としたテーマが与えられる。条件も全く無い状態で、その場所がどう適しているのか、その場所から何が得られるかをレポートにするのに苦労した」とあります。確かに苦労しそうです。

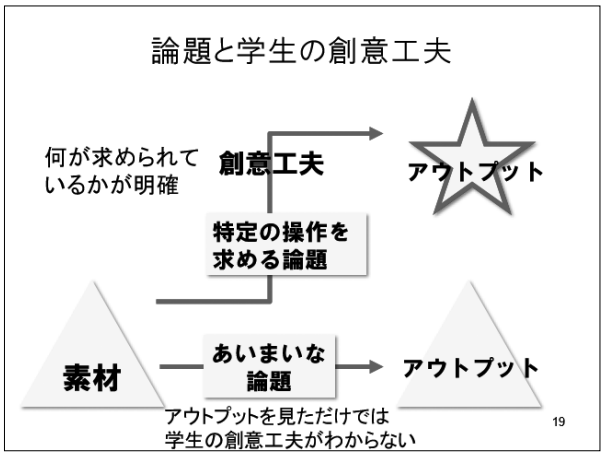
次の事例は、論題が「授業の中で興味をもったことについて、学術文献を読んで理解し分かったことをまとめよ。A４専用紙、2,000字程度、６日間、手書き。インターネットを参考にしてはいけない「感想文」不可」で、苦労した内容が「テーマ設定も抽象化しやすく大変だったうえ、どこまで自分の意見を入れてよいのかも分かりづらいものだった」と書かれています。

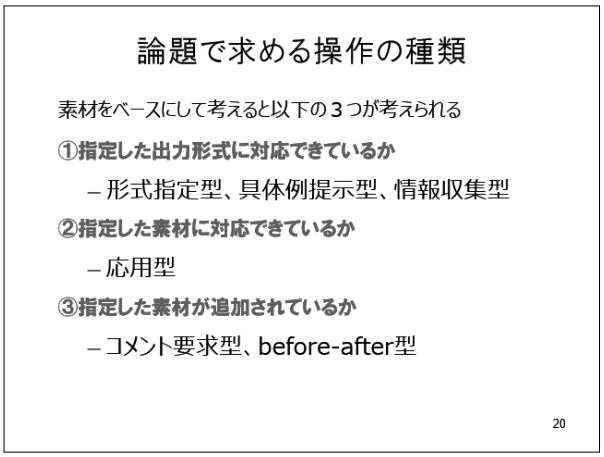
次の事例は、論題が「あなたの専門分野における擬態とそれを見破る方法について論じよ」で、苦労の内容が「授業をふまえないで自分の意見を書いていいのか、かといって授業の内容をふまえるとレポートが書けない」。

そして次に、論題が「外来生物を１種選び、調べたことを書け」で、苦労の内容は「レポートは自分の意見や考えを書くものだと教えられたが、生物について調べたこと以外のことも書かないといけないのか、調べた事実だけでいいのか分からず悩んだ」と書かれています。これは論題が曖昧なパターンですね。曖昧な論題が必ずしも悪いというわけではなく、そこでどういう内容にするべきかを自分で考えて書くことを促すという意図もあるかと思います。卒業論文もこの形式に当てはまるので、これが悪いというわけではありませんが、この学生達にはその意図が伝わっていなかったということは考えるべき点かと思います。

こちらの資料は海外の研究（Devlin, M. and Gray, K. 2007. “In their own words: a qualitative study of the reasons Australian university students plagiarize”, *Higher Education Research and Development*, 2007, 26(2), pp. 181-198.）で「剽窃をする理由を学生に調査したら８つのパターンに分かれた」という、よりストレートな調査です。１つ目が「入学時のレベルが低いので、剽窃するしかない」、２つ目が「剽窃が何か分かっていない」、３つ目が、「自分で調べたり、考えたりするスキル、またそのための時間を作るスキルが低い」、４つ目が「課題がフェアではない、難しい、できないと感じる」、こういうときに学生は剽窃をしてしまうと書かれています。そして、資料では赤で囲んでいますが、１つ目から４つ目までは「何をすればよいか分からないので剽窃してしまった」ということが理由なので、指示を具体的に出すようにすれば、１から４に当てはまる学生は剽窃をしなくなる可能性があります。教員側からするとコピ







ぺや剽窃は悪意に満ちた印象を持ってしまいますが、必ずしもそうではないということです。もちろんそれだけではなく、剽窃した理由の５つ目「怠惰、剽窃したほうが楽」や６つ目「ばれずに剽窃できることが誇らしいと感じる」など、論題を具体化しても防げない事例もあります。とはいえ、まずは論題を検討することが必要かと思います。

「〇〇について概略を述べよ」のような曖昧な論題では、より具体的な別の論題よりも剽窃が多かったという研究もありますし、論題が曖昧だと学生が何をすればいいか分からなくなってしまうので、そういう論題を出す場合は「具体的にこう書く」という指導が必要になります。資料の一番下に「その論題で何が求められているのか」とありますが、つまり学生にどのような貢献や創意工夫を求めているかを事前に設計し、明確にしておく必要があるということです。

ここでレポート論題を設計するときの考え方ですが、資料の右側にある完成形プロダクトが、最終的にどのようなレポートになってほしいかというイメージです。教員の皆さんはある程度イメージをお持ちだと思いますが、その完成形というのは、おそらく学術論文のようなものを理想にしている方が多いのではないでしょうか。一方で、学生の視点から考えると、テキストやノート、インターネットなどの「素材」を手にレポートを書いています。特にインターネットの存在は大きく、「〇〇について述べよ」のような論題だと、〇〇の部分を検索すればウィキペディア等で解答がそのまま出てきます。そうした素材が手元にあることを踏まえ、その上でどのような創意工夫を求めるかを事前に設計する必要があります。資料の下の方にあるように、素材が手元にある状態で論題が「〇〇について論ぜよ」というような曖昧なものであれば、素材をそのまま書き写すだけでアウトプットが終わってしまいます。これは比喩的な例ですが、三角形の素材がある状態でアウトプットを星形にしなさいという指示であれば、三角形を星形に変換する工夫が必要になります。つまり、素材に対して特定の操作を求めるような論題というのが、学生にとっては分かりやすい論題であるということです。

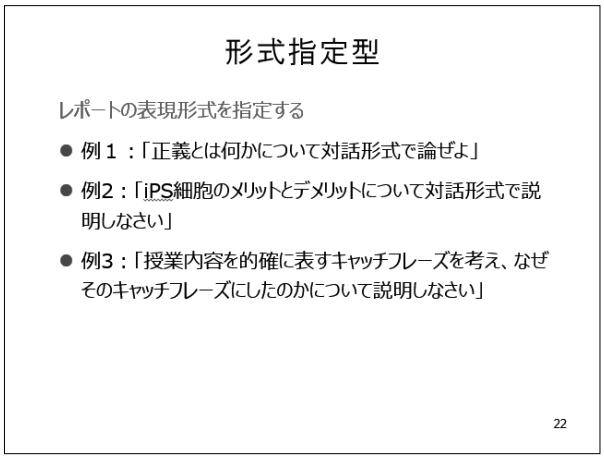
この特定の操作というのは具体的に３つのパターンがあると考えています。１つ目が、指定した出力形式に対応させること。これはまさに、先程見たような星形にするというケースです。具体例を挙げると「会話形式でレポートを書きなさい」のような論題です。Ａさんと Ｂさんの会話形式で書かせるという方法で、これは実際に私も出題したことがあります。そうすると、ウィキペディアで情報を調べても、それを Ａさんと Ｂさんの会話形式に変換する必要があります。ですので、資料にある比喩的な例でいえば、三角形の素材を星形に変える必要がある。この出力形式を指定するというのがまず１つ。２つ目が、こちらが指定した素材に対応させるということ。これは後ほど言います。３

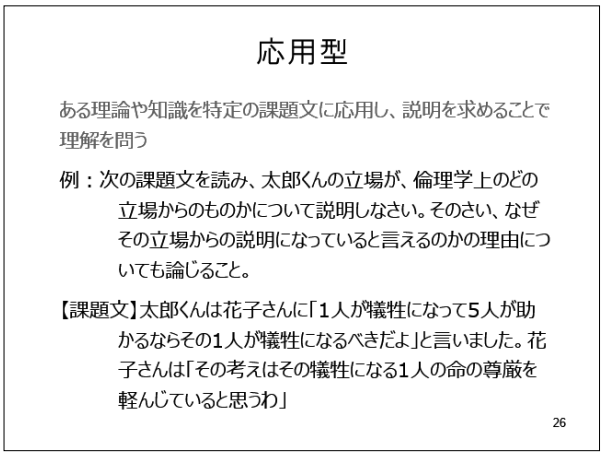
つ目は、指定した素材を追加できるかということです。以上の３つのパターンについて簡単に見ていきます。

まずパターン１「指定した出力形式に対応できているか」の中の「形式指定型」ですが、これは先程話した通り、レポートで表現形式を指定するという手法です。「会話形式で論じなさい」のような論題にすると、素材が会話形式で変換されます。「じゃあ、なんでこうなるの？」「いや、これはこうだよ」という変換の過程で理解度が深まっていく、あるいは創意工夫が求められるのではないかと考えています。「形式指定型」の中の３つ目の例は「授業内容を的確に表すキャッチフレーズを考えよ。何故そのキャッチフレーズにしたかについても説明しなさい」です。普通の授業の最終レポートにしては軽いとは思いますが、これは私が短大に勤めていたときに出題した論題です。キャリア科目の授業で、外部から講師を呼び、お話を聞いたあとに出題しました。授業の最後のコメント紙において、感想を書きなさいというと「楽しかった」で終わってしまいますが、この論題で出題すると、100名ほどの学生がいるのに誰一人内容が重なることなく、すごく良いキャッチフレーズがたくさん出てきました。何故そのキャッチフレーズにしたのかの説明が、授業内容の説明にもなります。何ていうことのない論題に見えますが、学生が創意工夫をしている点が見受けられました。これについては、出力形式を指定しているというところがポイントです。学生自身がキャッチフレーズという形に合わせようと考えるので、そこで創意工夫が求められ、学生からも何が求められているかが分かります。その過程で理解度の確認や思考、創意工夫が自然と求められると思います。

「情報収集型」というのは、情報収集を求め、出典の明記を求めるとともに、どの資料が重要でどの資料が重要でないかの説明を求めるというものです。これはコピペだけでは対応できません。内容としてはコピペしていい部分もありますが、その情報に対してどれがよかったのか、どれが必要ではないのかを評価しなくてはいけないので、これは自分で考えるしかないですよね。そして、この課題で求められていることは、論文で求められていることとほとんど同じです。実際の論文では資料に対して評価をつけるようなことはしませんが、プロセスとしては同じです。

パターン２「指定した素材に対応できているか」というのは、こちらから課題文のようなものを与えるパターンです。例として挙げているのは「次の課題文を読み、太郎君の立場が倫理学上のどの立場からのものかについて説明しなさい。その際、なぜその立場からの説明になっているといえるのかの理由についても論じること」という問題で、課題文が「太郎君は花子さんに、１人が犠牲になって５人が助かるならその１人が犠牲になるべきだよと言いました。花子さんは、その考えはその犠牲になる１人の命と尊厳を軽んじていると思った」というもの





で、この課題文は教員が作っているのでネット上にはありません。これに対応できていれば学生が自分で考えたことになるというパターンです。ただし、課題文を作るところは大変かもしれません。

最後のパターン３は「指定した素材を追加させる」という論題で、これが一番使いやすいです。このうち「Before-After 型（ビフォーアフター型）」は、授業を受ける前と後での理解の変化についての記述を求める課題です。「〇〇とは何か、授業を受けたことであなたの理解がどのように変化したか、そのあなたの理解の変化を説明し、追加する」というパターンです。「コメント要求型」というのは「自分のレポートに対する他者からのコメントを求める」というような出題形式です。例えば「〇〇について論ぜよ。その際、２人以上に読んでもらい、そのコメントを記載し、コメントに対する返答も書きなさい」というような論題で、人に読んでもらうことでレポートはさらに良くなりますし、仮にコメントを捏造したとしても、捏造するときに考える必要がありますよね。こういうことを求めるというのが、素材を追加するという論題の一例です。

ここまでの内容をまとめますと、教員によって論題や求めていることが異なりますが、学生はそうした多様な教員の多様なレポートに取り組んでいます。そうした多様性を踏まえて、論題には何を求めているかを明確に説明する必要があるということです。学生が様々な素材をベースにレポートに取り組んでいることを踏まえて、具体的にどのような創意工夫を求めているかを論題で明確にするということが必要だと思います。

３．レポート論題の多様性と整理

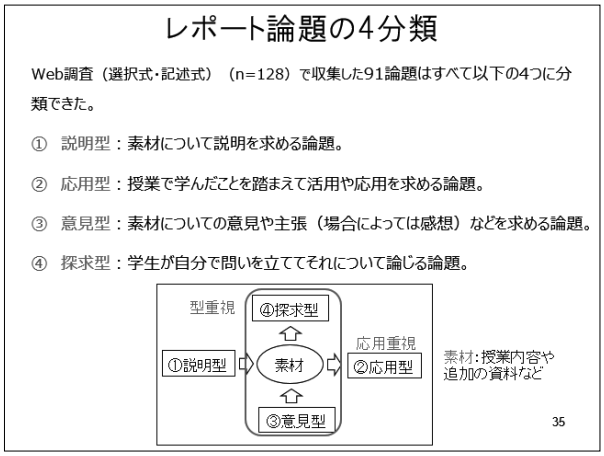
３つ目のセクション「レポート論題の多様性と整理」に移ります。こちらの資料は、37名の大学教員にインタビュー調査を行った際の結果です。インタビューでは、どのような問題を出されているか、どういう狙いがあるかを聞きました。その結果から、「応用重視派」と「型重視派」の２つのパターンに分かれるということが見えてきました。「応用重視派」というのは、レポートでは授業で学んだことを活用したり応用できたりするかが、重要だと考えておられる方です。「型重視派」というのは、レポートは型に沿って書き、その型を身につけることが重要であると考えておられる方で、特定のフォーマットを指定して書くことを求めています。主張や説得力、論旨論証を重視されている方です。是非型という、「〇〇に賛成か反対か」というテーマが設定されることが多いです。アカデミックライティングを重視されている方はこちらになると思います。講義科目のレポートにおいては、概ねこの２つに分かれるという印象を持っています。

少しだけみておきますと、「応用重視派」の論題というのは、例えば教育学部系における「授業内容を踏まえて、このあと追求したい学習指導（授業づくり）に関する課題とその理由をあげてください。そしてその課題について学年、教科や学習単元をあげながら、どのような授業を計画し、実施したいと考えるのかを説明しなさい」というような論題です。これは授業案を考えましょうという課題で、講義を踏まえて教案や授業案が作り出せるかという応用を問うています。こちらの例は少し分かりにくいかもしれませんが、科学哲学の「科学っぽいものを３つ探し、科学かどうか線引きしなさい」という論題で、説明が不十分ですが、科学と科学ではないものの違いを説明して、科学の事例を抽出するという課題です。これらの課題は応用が求められています。

一方で、型を重視される方の論題は、哲学系の例になりますが「テーマを１つ選んで倫理的問題や倫理的に懸念される事項を明らかにした上で、自身が専門家として、あるいは一般市民として将来的にこうした問題に携わることにな

ったとするならばどのように対処するかについて、（１）背景と現状、（２）倫理的な問題、（３）自身の立場と見解、（４）結語、との構成に沿って論じなさい」というような課題です。型がきっちりと指定されていて、卒業論文に近い構成です。ところが、前述の応用重視派ではそのような構成はないですよね。以上、大きくこの２つの派に分かれると思います。

レポートを主張内容と論証内容という２つに区別して見ていきます。主張内容というのはレポートの中身のことです。例えば「応用重視派」の場合では、どんな事例を取り上げるかという幅広い選択肢があり、主張内容の自由度が高いです。しかし、何故それを取り上げたのか、何故それは科学といえるのか・いえないのかという論証部分の自由度は低いです。つまり、この課題の論証部分は講義で習ったことを言うだけになってしまいます。これは科学でこういうのは科学ではない、そういったことを書くだけで、資料中の上の論題でも、「何故そのような授業にしたのか」という問いに対して「こういう授業が効果的だと習ったから」という一言で済んでしまい、論拠の部分は自由度が低いです。一方で、「型重視派」の場合、主張内容は自由度が低いです。例えば是非型の場合だと賛成・反対や条件付き賛成程度しかなく、先程の授業をピックアップするというのに比べると自由度が低い。しかし、何故そう思うのか・正しいといえるのかといった論証内容の部分の自由度は非常に高い。どのような論証を構築するのかがポイントで、こうして見ると２つの違いは大きいということが見えてきます。



ここまでがインタビュー調査で出した結果ですが、Web 調査ではさらに多くの論題を集めていて、それも踏まえると論題というのは全部で４つのパターンに分かれると考えています。こちらの２つ目の応用型というのは、先ほどみた「応用重視派」とまったく同じです。３つ目の意見型と４つ目の探求型は先ほどの「型重視派」に当たります。１つ目の説明型はどれにも当てはまってはいませんが、素材についての説明を求める論題です。３つ目は意見について求める論題です。４つ目の探究型は、学生が自分で問いを立ててそれについて論じるという一番高度なパターンです。

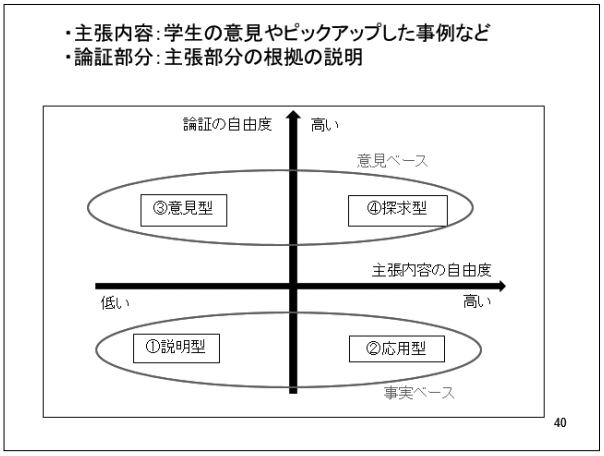
もう少し詳しく見ていきます。説明型の事例を見ますと、例えば「18世紀半ばから19世紀にかけてのイギリス人の消費生活の変化について説明しなさい。解答は必ず下記の語句から６個を選び記述すること」という問題で、これは説明することを求めている論題になります。下の方も「児童福祉施設の中から関心のある施設を１つ選び、それがどのような施設かを説明しながら、その現状と課題を論じてください」という、現状と課題を論じてくださいという論題です。これは先ほどの主張内容でいうと自由度は低いです。ほとんど正解があるわけです。内容に関しては正解があるので、コピペ対策のために出力形式の制限が必要になります。先ほど述べたように、何かキーワードを指定したり会話形式で説明したり、インターネットで検索しただけでは書けないようにする工夫が必要です。また、網羅性を求めるのか、講義で説明した全部を求めるのか、学生が自分の言葉で説明することを求めるのか、学生にどんな貢献を求めるのかを明確にしておかなければなりません。説明型は、学生の視点ですと「インターネットで調べた情報をそのまま使用して何故だめなのですか？」と見えてしまうので、その部分を考えておく必要があります。

２つ目の応用型は先ほどみたものですが、少し例を見ておきましょう。論題が「この授業では、規範の成立についての慣習主義的理論を検討してきました。その具体例として、授業中には、マヨネーズにカツオの刺身をつけて食べるのは望ましい、そして、デニムジャケットをレイヤードするのはかっこいいという規範の成立を挙げました。これらの具体例とデヴィッド・ヒュームの哲学を手がかりに、何らかのアート領域において新たな規範が成立するプロセスを、具体例をあげつつ記述してください。その際、少なくとも一つの参考文献を用いること」というもので、具体例を挙げるという形で事例をピックアップできるかという応用を求めています。よって、事例の自由度は非常に高い。しかし、根拠についての自由度は低いです。「いや、規範とはこういうものなのだ」というだけで終わってしまいます。アカデミックライティングで求められるレポートとは、また少し異なりますよね。講義科目のレポート課題を出されている方は、この応用型を出されている方が多いのではないかと思います。講義を理解していないと事例をうまくピックアップできないので、理解度の確認としてはとてもいいと思いますが、初年次にアカデミックライティングの指導で学んだことや卒業論文とも少し異なるので、学生が混乱しないような説明が必要かもしれません。

３つ目の意見型ですが、賛成・反対か検討して自分の立場を述べるというもので、これもやはり意見を求めています。何かについて自分の意見を持つというのは非常に重要なことなので、この意見型も大切な論題だと思いますが、内容が主観的にならないように具体的な書き方の指導が必要です。このような論題はアカデミックライティングとの親和性は高いですね。レポートの書き方本などを参考にしなさい、１年生で習ったあの科目のことを思い出しながら書きなさいというような指導ができます。ただし、テーマが是非型の場合はオリジナリティを発揮しにくいので注意が必要です。実際にこういう論題を出されている教員からすると、学生のレポートの内容がほとんど一緒になるので読んでいて面白くないという意見が多いです。一方で、応用型を出されている方は、先程のキャッチフレーズ型のようにレポートの内容が多様なので読んでいて楽しいという先生が多かったです。

そして最後は探求型です。これは一番高度ですね。「授業内容について問いを立てて答えなさい」「○○について自由に述べなさい」といった出題形式で、先ほど曖昧だと言いましたけが、問いを立てることを求める論題です。問いを立てるのは難しいので、その点で学生をサポートする必要があります。ですから、この問題を出されている先生は、講義の中でも問いを立てるというのはどういうことかというのを指導されている先生が多いです。自由度が高いので、３つ目の意見型と同様に、具体的な書き方の説明が必要になります。

このように論題を４つに分けましたが、資料の下側にある説明型・応用型というのはどちらかというと事実ベースの説明を求めているのに対して、上側にある意見型と探究型というのは、まさに意見を求めているというような違いはあるでしょう。そして、論証の自由度と主張内容の自由度というのは、この軸で分けると説明型は主張内容の自由度も低くて論拠も求めていないのですよね。応用型は主張内容の自由度は高いが、論調の自由度は低い。意見型は探求



型と比べると主張内容の自由度は低くなりますが、論拠の書き方や説明の仕方の自由度は高い。探求型は問いも自分でさせるので、一番自由度が高いです。卒業論文は４つ目の探求型に当たることから、それまで応用型ばかり出題していても肝心な卒論が書けないということになってしまうので、今後は大学でカリキュラムを講じて体系的に指導していく必要があるかもしれません。

「具体的な論題の分析１」のスライドですが、少しだけ、実際に私が収集した論題を分析してみます。「以下の（ア）～（エ）から１つ選び、テキストおよび講義内容を参考にして、(a) それがどういう問題なのか、(b) その問題についてどういう立場が存在するのか、(c) その問題について自分は今どう思うかを書ける範囲で述べよ」。これは某国立大学の先生が出されている論題です。その大学なら「◯◯について述べよ」だけで伝わるのではないかと個人的には考えたのですが、こういうステップを書かないとやはり狙った通りのレポートは提出されないということでした。これを見ていくと、やはり (c) の部分が一番重要になります。その問題についてどう思うかと、まさに意見を求めているわけです。しかし、いきなり意見を書いても安易なものにしかならないので、まずどのような問題なのかということを (a) の部分で問います。この (a) というのは、先程のマッピングでいうと説明を求めているだけなので、(a) だけで終わってもこの問題はよくありません。(b) についても、賛成するこういう立場と反対するこういう立場があると説明を求めているだけです。しかし、この (a) (b) を最初に書かせることで (c) の部分に厚みが出てきます。ですので、この論題は (c) だけで出しても (a) だけで出しても安易なものにしかなりませんが、組み合わせることでよい論題になるという一つの例です。先ほど論題のタイプを４つに分けましたが、これはレポート論題の中の指示文、文章のレベルで分けたときの分類なので、組み合わせは十分可能だということです。

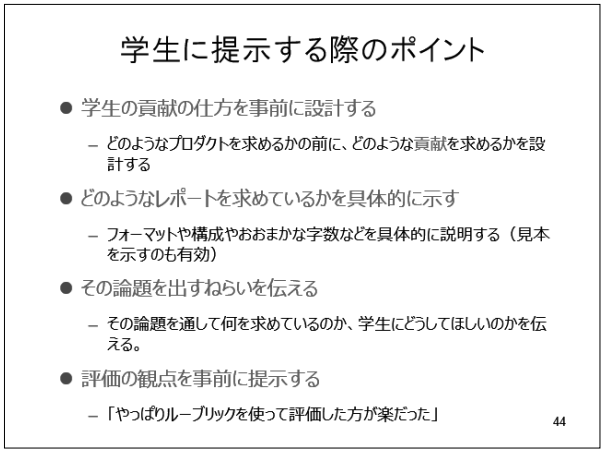
「具体的な論題の分析２」のスライドですが、「この授業を受ける中で、これまでの経験（学校での経験、友達との経験、テレビ・マンガなどの視聴経験など）に対する解釈が変わることがあるはずです。自分の中で経験の解釈が変わったことを一つ取り上げて、次の４点について論じなさい。（１）その経験の概要、（２）それまでどのようにその経験を解釈していたのか、（３）それが教育社会学の知識を経由することでどのように変化したのか、（４）以上を踏まえて、教師になる上で教育社会学を学ぶ意義」という論題。これは直接的には授業内容の説明を求めているわけではありませんが、経験の解釈が変化した事例のピックアップを求めています。事例を１～４の観点で説明するということが求められていますが、その事例を全体的にピックアップさせてるというところで、応用型といえると考えています。このように他の先生の論題を見る機会はあまりないと思いますが、皆さんはそれぞれ既に多くの蓄積があると思いますので、学科内や近くの先生方同士だけでも論題を共有していただいたら、すぐに使えるテクニックが見つかることもあるかと思います。

４．学生への提示の仕方を考える

そして最後のセクション「実際に学生へ提示するときにどのようなことを考えないといけないのか」ということを、まとめとして見ていきたいと思います。これまでの内容を踏まえますと、まずは学生の貢献の仕方を事前に設計することが重要だと思います。どのようなプロダクトを求めるかの前に、情報収集をするのか、自分の言葉でまとめるのか、アイデアを見つけさせるのか、整理をさせるのか、学生に何を求めるのかを設計する。それが、学生が素材を手にしているという前提で見たときに、学生にその狙いが伝わるのか、そういう設計になっているかというのが１つのポイントだと思います。

２つ目「どのようなレポートを求めているかを具体的に示す」。教員によってフォーマットが多種多様というのは今日のセミナーで気付いていただけたと思います。箇条書きでいいという先生もおられますし、見出しをつけないといけない、セクションに分けないといけないという先生もおられます。800字でいいという先生もおられれば、先ほどのように2,000字書かないといけないという先生もおられますし、感想でいいという先生もおられます。それらが良いか悪いかは別にして、様々な教員の講義を受けている学生側からすると、その先生が何を求めているのかすぐには分かりません。評価基準などは示されていると思いますが、フォーマットや構成、大まかな字数なども具体的に示した方がよいでしょう。或いは、見本などを示せばイメージもしやすいと思います。字数についても、教員側からすると「なんとなくで、分かるでしょ」と思いますが、学生からするとそれも分かりやすい指標になるので、一つの目安として伝えるのがいいと考えています。

次に、その論題を出す狙いを伝えるということですね。実際にあった事例を挙げますと、ある先生が「◯◯について説明をして、それについてあなたの意見を述べなさい」という論題を出し、その先生は意見よりも説明の部分をしっかり書いてほしかったのですが、学生にはそれが伝わらず、意見の部分を重視して書いた学生は低い点数をつけられてしまいました。しかし翌年から、説明の部分は何割、意見の部分は何割と出題すると先生の狙い通りの結果になりました。やはり論題だけで学生とコミュニケーションを取るというのは難しいので、何故そういう論題を出しているかという「狙い」も含めて伝えるということが大事だということです。質問を受け付けて、細かな部分も示していくことも必要になってくるかもしれません。



最後は「評価の観点を事前に提示する」ということです。先ほどお伝えしたことを事前に設計すると、どこを評価すべきか、というのが自然と見えてくると思います。評価に関しては、私の大学はいま Google Classroom を使っていて、そこに付属しているルーブリックの機能を使っています。以前にもルーブリックの有用性を感じたことがありましたが、いまは特にオンラインでも使えるので有用性を再確認しています。インタビュー調査でも、ルーブリックを使っている先生がいらっしゃいました。自分の課題に合ったルーブリックを作る必要があるので最初は少し時間が必要ですが、一度作ってしまえば評価付けが楽になります。学生に何を求めているかの共有についてもルーブリックが有効だと思います。

私からの話は以上となります。お時間をいただき、ありがとうございます。最後に、このセミナーを受けられた上で改めて「良いレポート」とはどんなものかというのを先程のＢ４の紙に書いてください。セミナーを受けても意見は変わらない方、意見が変わった方、セミナーとは直接関係ないが新たな気付きを発見された方、様々な意見があると思いますが、一言でまとめていただけたらと思います。お願いいたします。

【グループディスカッション③】

（各自の意見を記入後、グループでフリップトークを実施）

そろそろ終わりましたでしょうか。ありがとうございます。各グループの意見を聞いていま

すと、やはり皆さん共通する話題が多いですね。私はもうレポート課題オタクで、一日中レポート課題を見ていることから、皆さんの意見を全部聞いて回れなかったのは残念ですが、また様々な情報を共有させていただけたらと思います。本日はありがとうございました。